

シンポジウム「『漁場図』を読む」

日時 2015年12月5日(土) 13:00~18:00 会場 神奈川大学横浜キャンパス 305教室

パネル報告

「なぜ『漁場図』は残ったか—常民研所蔵資料から—」

窪田涼子・越智信也(神奈川大学日本常民文化研究所)

「松江藩・島根県の『漁場図』情報を読み解く—歴史学からのアプローチ—」

伊藤康宏(島根大学)

「近世・明治期の漁場図、沿岸絵図にみる景観表現—歴史地理学からのアプローチ—」

橋村 修(東京学芸大学)

「漁場図の活用と可能性—地理学からのアプローチ—」

横山貴史(立正大学)

「ヤマアテと漁場図—民俗学からのアプローチ—」

安室 知(神奈川大学日本常民文化研究所)

総合討論

「漁場図研究のこれから」パネリスト全員(司会:安室 知)

シンポジウム開催の目的と成果

安室 知

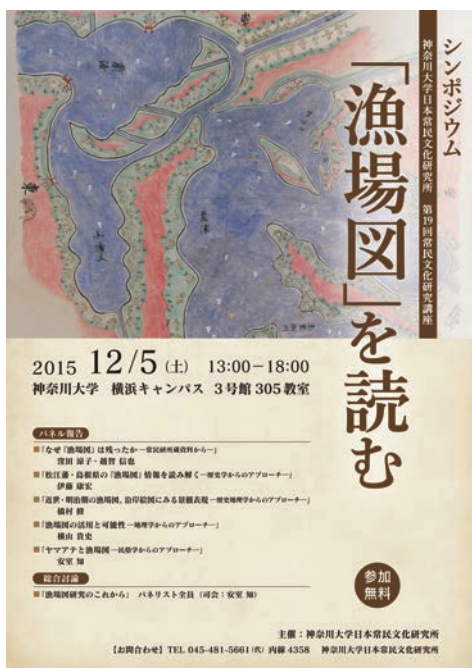


写真1 第19回常民文化研究講座パンフレット

〈シンポジウムの目的〉

日本常民文化研究所はその発足の早い段階から漁業制度資料等による海域・海民史の研究に取り組み、能登半島や瀬戸内海の二神島といった地域で多くの研究蓄積をなしてきた。また、本年度からは、共同研究「海域・海村における景観史に関する総合的研究」に取り組んでいる。本シンポジウムはそうした研究蓄積をもとに、常民研に所蔵される膨大な数の「漁場図」に焦点を当て、その研究資源としての価値を問うものである。

海は、水産物だけでなくさまざまな資源を生み出す空間であるとともに、その利用に当たっては人・物・情報の行き来する場となり、またそうした生活の営みを通して社会知や民俗知が膨大に集積される空間となっている。反面、負の記憶として、海域の利用をめぐる個人や村のレベルから国際的な問題までさまざまな対立や紛争を生んできたし、また海という大自然とたえず対峙す

る海村では大きな災害や事故が歴史的に繰り返されてきた。そうした海域・海村の歴史文化について、「漁場図」を手がかりに、学際的に研究することが本シンポジウムの主な目的となる。

また、本シンポジウムはそうした活動を広く市民に公開し、かつ漁場図に関して常民研内外の研究者と情報交換をはかる意図をもって企画された。



写真2 会場風景

〈シンポジウムの内容〉

シンポジウムでは、5本のパネル報告と総合討論がなされた。6名のパネリストは歴史学のみならず多様な分野から選定され、学際的な漁場図の読み解きがなされるように工夫されている。パネル報告・総合討論のタイトル・報告者は以下の通りである。(パネル報告)

1. 「なぜ『漁場図』は残ったか—常民研所蔵資料から—」 窪田涼子・越智信也（日本常民文化研究所）
2. 「松江藩・島根県の『漁場図』情報を読み解く—歴史学からのアプローチ—」 伊藤康宏（島根大学）
3. 「近世・明治期の漁場図、沿岸絵図にみる景観表現—歴史地理学からのアプローチ—」 橋村修（東京学芸大学）
4. 「漁場図の活用と可能性—地理学からのアプローチ—」 横山貴史（立正大学）
5. 「ヤマアテと漁場図—民俗学からのアプローチ—」 安室知（日本常民文化研究所）



写真3 発表の様子



写真4 総合討論の様子



写真5 漁場図「近世海岸俯瞰図」 常民研所蔵



写真6 漁場図「入津誘導図」 常民研所蔵

（総合討論）

「漁場図研究のこれから」パネリスト全員（司会：安室知）

まず冒頭のパネル報告において、常民研にはなぜ大量の漁場図が残されているのか、またその研究資料としての魅力について具体例を示しながら検討した。それを受けて、以後のパネル報告では、具体的に日本各地の漁場図を取り上げながら、文献史学・歴史地理学・人文地理学・民俗学といったパネリストの専門とする分野から漁場図の解析がおこなわれた。

パネル報告の後は、パネリスト全員が登壇し、学際的な総合討論をおこなった。討論はフロアからの質問を受けるかたちでなされ、最後に今後の漁場図研究のあり方について、展望と課題が各パネラーから述べられた。

〈シンポジウムの成果〉

漁場図に関する常民研の共同研究は始まったばかりであり、その意味では今回の常民文化研究講



写真7 漁場図「珠洲郡鯨網仕立図」 常民研所蔵



写真8 漁場図「鯨網仕立図」 常民研所蔵

座は共同研究の成果公開というよりは、漁場図の持つ研究資源としての魅力を広く市民に問い、今後の共同研究のあり方を探ることに主眼が置かれるものであった。北は東北、南は九州・沖縄まで120名を越す参加者を得たこと、またフロアーから多くの意見・感想が寄せられたことで、その目的はある程度果たされたといえる。

フロアーから寄せられた意見の多くは、研究の進展を期待するものであり、漁場図を含む常民研の資料が広く研究資料として公開されることを望むものであったことは、今後の常民研の活動にとって重要な示唆となった。

なお、本シンポジウムの成果は、常民研が編集する『歴史と民俗』（日本常民文化研究所論集）33号（2017年2月刊行予定）において公開する。

[資料図録] 漁場図

2015年12月5日に開催された第19回 常民文化研究講座シンポジウム『『漁場図』を読む』の会場内において、神奈川大学日本常民文化研究所所蔵資料である漁場図の大型カラーコピー十数点を掲示した。資料図録として本誌掲載にあたり、その中から数点を抜粋した。

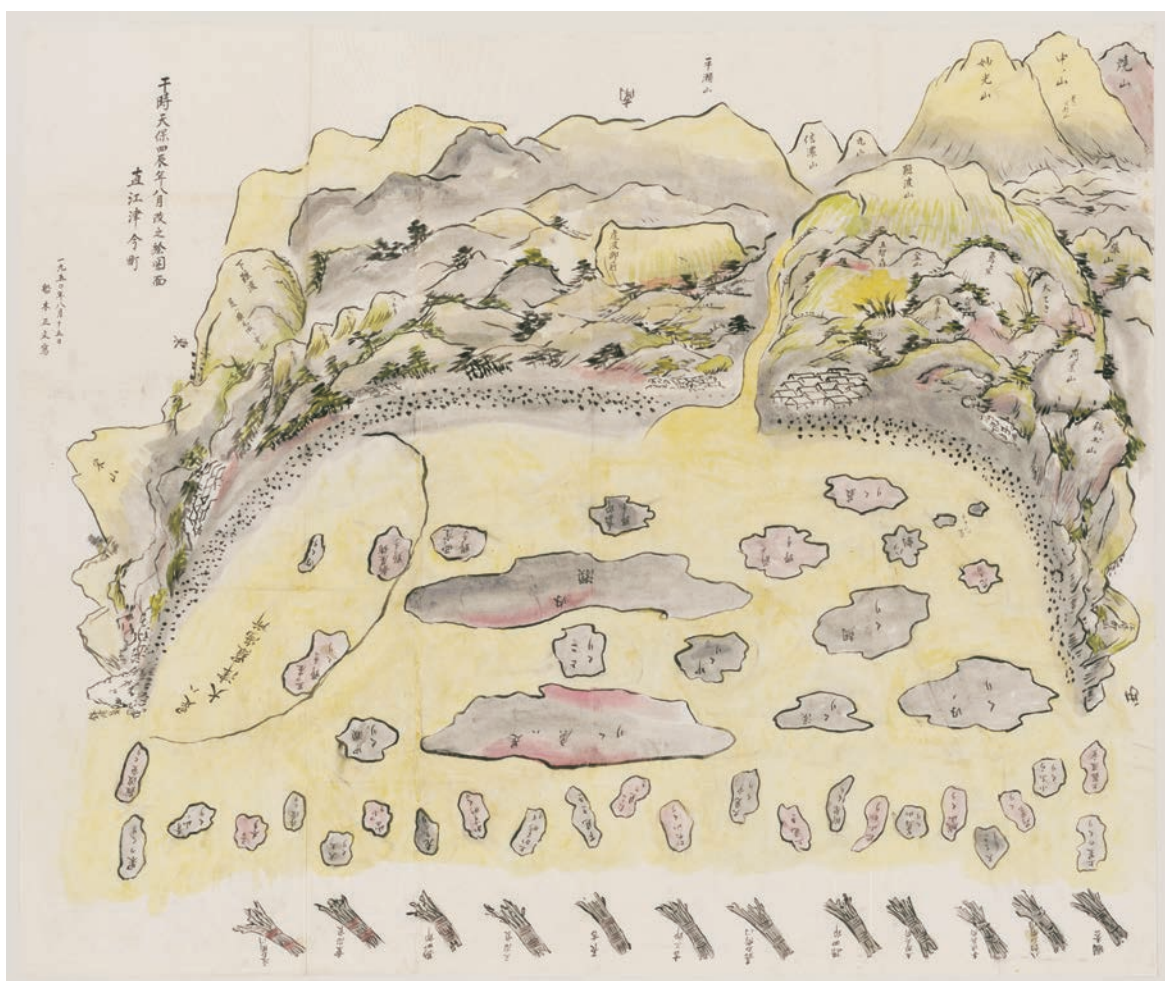


写真1 新潟県上越市（直江津）沖（神奈川大学日本常民文化研究所所蔵）



写真2 山あて図（神奈川大学日本常民文化研究所所蔵）



写真 3 鰻立切網操業図（神奈川大学日本常民文化研究所所蔵）

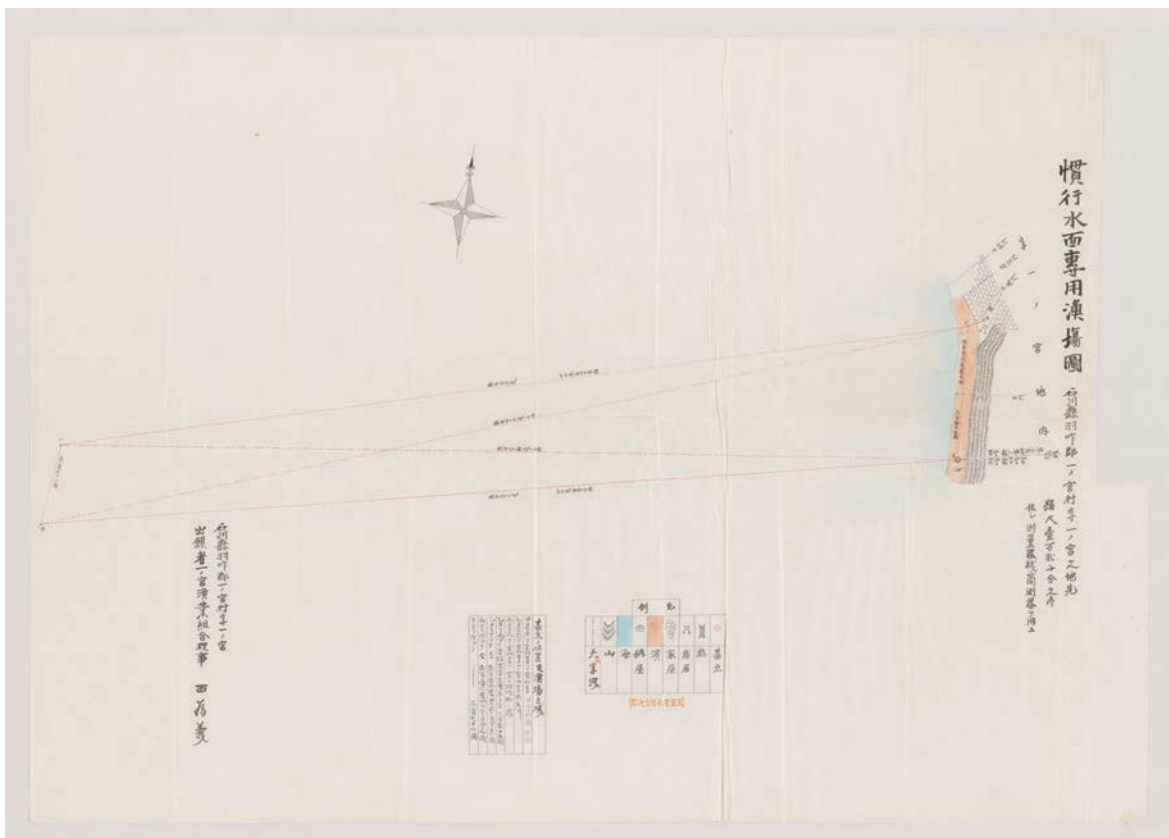


写真 4 慣行水面専用漁場図（神奈川大学日本常民文化研究所所蔵）